

『銀河鉄道の夜』から （２）賢治の感性

藤原 道夫

賢治の故郷花巻では天の川がよく見えたとに違いない、今よりも空はずっときれいだったし人工照明が少なかった。賢治の想像力はたくましい、天の川がどうしてもがらんとした冷たいところではなく、林や牧場のある野原のように思える。そしてそこに鉄道を走らせ、独特の感覚を駆使して情景を描写してゆく。『銀河鉄道の夜』からいくつかの感覚的描写を挙げてみよう。

天の川の水について「ガラスよりも水素よりもすきとおって、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらっと光ったりしながら・・・」と記す。また「向こう岸も、青じろくぼうっと光ってけむり、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さっとその銀色がけむって・・・りんどうの花が、かくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました」などと描く。

音楽のこともしばしば記される。自身チェロを習って時々弾いていたようだし、生家には田舎にしては珍しく蓄音機にレコードがあった。

「森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云えずきれいな音いろが、とけるように浸みるように風につれて流れて来るのでした」

「・・・遠く野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。新世界交響曲だわ・・・」

「ハレルヤハレルヤ。明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのそらの遠くからつめたいそらの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました」

独得の擬音もよく用いる。例を挙げると「・・・彗星がギーギーフーギーギーフーて云ってきたねえ」。また「ごとごとごとごと、そのきれいな列車は、そらのすすきの風にひるがえるなかを、・・・、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした」。

これらの感覚的な表現は賢治生来の感性と生地の風土とが相まって生れたのだろう、文に独特の雰囲気をもたらしている。読むほどに引き込まれてゆくを感じる。